

人文会ニュース

jinbunkai news

December 2020

NO. 136

1
15分で読む

ホロコーストはなぜ起こったか

田野大輔

14
書店現場から

本棚から考える 「読書の学校」

三砂慶明

22
図書館レポート

授業で学校図書館を活用する

—— 体育の授業で本を使う（豊田市立萩野小学校の実践から）

塩谷京子

32
編集者が語るこの叢書・このシリーズ ⑬

パルマケイア叢書から叢書パルマコンへ

山口泰生



www.jinbunkai.com

世界的ベストセラーの
改訳・新装版！

愛 するということ

エーリッヒ・フロム 鈴木晶訳

愛は、幸福に生きるための技術であり、
学ぶことができる——「愛」という万人
に切実なテーマに正面から挑んだ現
代の古典。フロム生誕120年を記
念して刊行。

▼本体価格1300円＋税

フロムによる永遠の古典

生きるということ 新装版

佐野哲郎 訳 ▶本体価格1900円＋税

紀伊國屋書店

出版部：東京都目黒区下目黒3-17-10
営業TEL03(61910)0519

気候危機が要請する革命のビジョン
グレタ・トゥーンベリ氏、斎藤幸平氏推薦！

地球が 燃えている

気候崩壊から人類を救う
グリーン・ニューディールの提言

ナオミ・クライン 著 46判・2600円
中野真紀子・関房江 訳

ファシズムの 教室

なぜ集団は
暴走するのか

田野大輔 著 46判・1600円 [4刷]

東京文京 大月書店 電話03-
本郷2-27 3813-4651
otsukishoten.co.jp (税別価格)

慶應義塾大学出版会

<http://www.keio-up.co.jp/>

僕の大統領は 黒人だった 上・下

—バラク・オバマとアメリカの8年

タナハシ・コーツ著／

池田年穂・長岡真吾・矢倉喬士訳



アフリカ系アメリカ人が辿った過酷な歴史を踏まえながら、アメリカ初の黒人大統領バラク・オバマと黒人社会が歩んだ8年の軌跡を丁寧に辿り、圧倒的な賛辞を集めた全米ベストセラー。 各◎2,500円

〒108-8346 東京都港区三田2-19-30 【価格税抜】
Tel 03-3451-3584 Fax 03-3451-3122

御茶の水書房

フラのハワイ王国史

王権と先住民文化の比較検証を通じた九世紀ハワイ史像
目黒志帆美 著 菊判 三〇〇頁 本体七八〇〇円＋税

震災復興と生きがいの社会学
(私的な問題)から捉える地域社会のこれから
望月美希 著 A5判 三四頁 本体七八〇〇円＋税

仮設住宅 その一〇年
陸前高田における被災者の暮らし
宮城孝・山本俊哉・神谷秀美・陸前高田地域再生支援
研究プロジェクト 編著 菊判 三五〇頁 本体六五〇〇円＋税

東京都文京区本郷5-30-20 ☎03(5684) 0751

— 15 分で読む —

ホロコーストはなぜ起こったか

第二次世界大戦中、ナチス・ドイツによって遂行されたユダヤ人の大量虐殺Ⅱホロコースト。六〇〇万人にも上る犠牲者を出したこの未曾有の惨劇について考えるとき、私たちはすぐにアウシュヴィッツ強制収容所での組織的・機械的な殺戮を想起しがちである。だがこうした一面的なイメージにとられすぎると、大量殺戮にいたるホロコーストの紆余曲折に満ちた展開を見落とすことになりかねない。ナチスは当初からユダヤ人の虐殺を計画していたわけではなく、むしろ明確な目的なしに様々な政策を実施していった結果、最終的にアウシュヴィッツに行き着いたと見るべきである。

過去三〇年あまりの研究は、ホロコーストが多様な要因の絡み合う複雑なプロセスの産物であることを明らかに

にしている。このプロセスを理解するための視座として、近年あらためて注目されているのが「累積的急進化」の概念である。ある措置が次のより過激な措置の可能性を拓くというナチス特有の政策決定過程を説明するのに用いられたこの概念は、反ユダヤ政策がユダヤ人の絶滅へと急進化していったプロセスを説明する上でも有効だと考えられる。本稿ではこのような観点からホロコーストの大きな流れを整理し、この史上類を見ない惨劇を理解するのに必要な基本的視角を提示したい。

迫害と移住の推進（一九三三～一九三九年）

一九三九年九月に戦争が始まるまで、ナチスの反ユダ

田野 大輔（甲南大学教授）

ヤ政策はユダヤ人への法的差別や経済的圧迫、さらには露骨な暴力行使を通じて、彼らの国外移住を促進するとに重点を置いていた。ナチ党が結党当初から反ユダヤ主義を喧伝し、政権獲得後には公的権力を行使してユダヤ人の迫害を進めたことはたしかだが、この段階ではまだドイツからの排除を追求していたにすぎず、当初から大量殺戮を志向するマスター・プランが存在したわけではなかった。この時期の反ユダヤ政策はむしろ、その後の展開を方向づける条件を作り出したものと理解すべきである。

一九三三年一月末の政権獲得後、ナチスは矢継ぎ早に反ユダヤ的な法律を施行して、ユダヤ人の社会からの排除を進めた。その嚆矢となったのが、三三年四月初めの「職業官吏再建法」である。これによってユダヤ人や左翼の公務員が強制退職させられ、様々な分野で自発的にユダヤ人・政治的反対派を追放する動きが強まることになった。ユダヤ人の職業活動への締め付けはその後も段階的に強められ、医師や弁護士、大学教授などの職に就くことも禁止された。こうした立法措置と並行して、ナチスが政権獲得直後から大々的に反ユダヤ・キャンペーン

ンを展開したことも重要である。とくに三三年四月にナチ党の煽動で始まったユダヤ人商店での不買運動、いわゆる「四月ボイコット」は、現場の活動家たちの無法な暴力を拡大させ、ユダヤ人の社会的孤立を深めることになった。

だがユダヤ人の社会活動を著しく制限する画期となったのは、何といっても一九三五年九月に制定された一連の「ニュルンベルク法」(ドイツ人の血と名誉を守るための法)と「帝国市民法」だろう。これらの法律はユダヤ人から公民権を剝奪すると同時に、ユダヤ人にドイツ人およびその類縁の血をもつ者との婚姻・性交渉を禁止するもので、これに違反した者は厳しい社会的制裁を受けることになった。ナチ党は全国各地で「人種汚辱」を取り締まるキャンペーンを展開し、ユダヤ人男性と関係をもつたドイツ人女性を引き回して見せしめにするなどしたが、こうした無法な制裁行為が一般市民のユダヤ人への憎悪を煽り、その後の暴力的な迫害に道を開いた点には注目する必要がある。

他方、ナチスは政権獲得直後から着々と警察権力を拡大し、ユダヤ人の迫害を可能にする暴力装置の強化を進

めた。一九三三年二月末の国会炎上事件を利用して憲法に定める基本権を停止したヒトラー政権は、共産黨員・社会民主党員などの政治的反対派を一齐に逮捕したが、これら大量の人びとを収容するために設置されたのが、後にユダヤ人迫害の手段となる強制収容所である。ただし初期の収容所は左翼・マルクス主義者の再教育を目的としており、ユダヤ人を人種的理由で迫害するための施設ではなかった。こうした状況が変化するのは、三六年六月に親衛隊長官ヒムラーが全警察の指揮権を掌握して以降のことである。ヒムラーは単なる政治的反対派の排除ではなく、ドイツ民族を脅かすあらゆる人種主義的敵の撲滅をもとめ、警察機構をそのための手段に変えることをめざした。強制収容所もダッハウ、ザクセンハウゼン、ブーヘンヴァルトの三カ所に拡大され、労働忌避者や同性愛者、ユダヤ人、シンティ・ロマなどの「有害分子」が大量に収容されるようになった。生物学的・人種主義的に定義される犯罪者の撲滅には、人種衛生学の研究機関も積極的に関与した。

こうして迫害が強化されるのに伴い、毎年二万人から四万人のユダヤ人が国外移住の道を選ぶようになった。

ユダヤ人の出国者数は年によって波があり、誰もがすぐにドイツでの生活に見切りをつけられたわけではないが、年を追うごとに出国が困難になっていったことはたしかである。これは受入国の入国制限が厳しくなったことが最大の理由だが、一連の反ユダヤ政策による経済的困窮に加えて、法外な出国税や極端な財産持ち出し制限も出国を阻害する効果をもった。ユダヤ人への経済的圧迫については、一九三七年二月からユダヤ人所有の企業・店舗の強制的売却、いわゆる「経済のアリア化」が進められ、財産の収奪が強化されるようになったことも重要である。ナチスの反ユダヤ政策は暴力や搾取を通じてユダヤ人の国外移住を促すものだったが、それはかえって対象者を困窮化させ、出国を停滞させるという矛盾をはらんでいた。その後ドイツがオーストリア合邦とチェコ侵攻によって数十万人のユダヤ人、さらにポーランド占領によって三〇〇万人以上のユダヤ人を抱え込むと、国外移住策は行き詰まることになった。戦争による領土拡大とユダヤ人の追放政策の間には、根本的なディレンマが存在していたといえるだろう。

そうしたなか、一九三八年一月にはこれら一連の政

策の集大成というべき事件が起こる。一月九日夜にド

イツ全土で発生した反ユダヤ暴動、いわゆる「十一月 Pogrom」（「水晶の夜」とも呼ばれる）である。ユダヤ人への報復を呼びかける宣伝相ゲッベルスの演説が引き金になって生じたこの暴動では、ナチ党・突撃隊に動員された暴徒たちが各地のユダヤ人街を襲撃し、ユダヤ教のシナゴグへの放火、ユダヤ人の商店や住居の破壊・略奪といった狼藉行為をくり広げた。親衛隊と警察は三万人を超えるユダヤ人を逮捕し、国内三カ所の強制収容所に収容したが、彼らを釈放する条件の一つとされたのは、出国への同意だった。事件後、関係各省庁の代表が会議を開いて対応を協議し、ユダヤ人に巨額の損害賠償を支払わせるとともに、彼らの財産の接収と経済からの締め出し、国外移住の一層の推進を決定した。これ以降、ドイツ国内では露骨な暴力行使は影をひそめるが、それにかわって前面に出てくるのが、親衛隊・警察主導の組織的な迫害である。アイヒマン率いるユダヤ人移住局の働きもあって、この時期にはユダヤ人の出国が増加するが、各国の入国制限や戦争の開始により成果は頭打ちになり、国内には高齢かつ貧しい人びとが数多く残されることに

なった。

戦争と虐殺の開始（一九三九～四二年）

一九三九年九月に戦争が始まると、ナチスの反ユダヤ政策は大きく方向を転換することになった。この転換の背景としてまず指摘できるのは、対ポーランド戦が通常の戦争とは異なって、現地住民の大量殺戮を伴う絶滅戦争だったことである。親衛隊・警察を主力とする特別行動部隊（アインザッツグルッペン）は、占領地域でポーランド人エリートの大粛清やユダヤ人住民の殺害をくり広げたが、そうした残虐行為はまぎれもなく、人種主義的敵意に動機づけられていた。ドイツ軍の兵士たちも現地で貧しいユダヤ人を目にして、「劣等人種」への反感を強めるようになった。各地でなし崩し的に始まった虐殺が、そうした反ユダヤ主義の急進化を反映していたことは疑いない。

この関連ではまた、一九三九年末からポーランド西部・ドイツ本国のいくつかの施設で障害者の組織的殺害、いわゆる「安楽死」作戦（コードネーム「T4」）が開始さ

れたことも示唆的である。ヒトラーおよび総統官房の指令で実行されたこの作戦では、「生きるに値しない命」とされた障害者が主として排気ガスを使って殺害されたが、「劣等分子」の排除という優生学的発想やそれを実現するための「科学的」技術は、後のユダヤ人絶滅政策にも引き継がれることになる。

しかもこれらの虐殺は、ポーランドの一部を「ゲルマン化」しようという計画、いわゆる「民族の耕地整理」の展開とも連動していた。ソ連とともにポーランドを分割占領したドイツは、占領地域の西部を本国に併合すると同時に、この地域からユダヤ人やポーランド人の住民を立ち退かせ、そこに本国のドイツ人や在外の民族ドイツ人を入植させる計画を進めようとした。残りの地域はドイツの支配する「総督府」となり、本国に食料・労働力を供給する属領として徹底的な搾取の対象とされた。この植民地化計画は、東方にドイツ民族の「生存圏」を確保するというヒトラーの遠大な計画の一環をなすもので、ホロコーストの展開にも決定的な影響を与えた。障害者の殺害にしても、帰還する民族ドイツ人のために施設を空けることが重要な目的だった。

こうした計画の実施に伴い、ユダヤ人問題の解決策として浮上してきたのが、「東方」への追放という方策である。「東方」が意味するところは漠然としていて、その内容は時期によっても変化したが、この段階ではポーランド東部の総督府への移送が想定されていた。そしてこのユダヤ人の移送を円滑に進めるための一時的な中継地として、ポーランド各地の都市内に設けられた隔離居住区域が、いわゆる「ゲットー」である。これはユダヤ人のための巨大な強制収容所というべきもので、ワルシャワやウッチなどのゲットーには周辺地域から何十万人もの人びとが集められて収容され、劣悪な食料・衛生状況のもとで苛酷な生活を強いられた。ドイツの占領地域に設置されたゲットーの数は延べ一〇〇〇カ所、そこでの死者数は一〇〇万人以上に上ると目されている。

ただしここで留意しておく必要があるのは、この段階でのユダヤ人追放政策が領土的解決を前提としており、必ずしも大量殺戮を意味してはいなかったことである。民族性強化全権として計画に責任を負ったヒムラーも、この時点ではまだ殺害はボルシェヴィキ的な方法であるとして、これを明確に否定していた。ところがドイ

ツ併合地域からユダヤ人を追放する計画は、一九三九年一〇月末に開始されてまもなく、乗り越えがたい壁に直面してしまった。追放先の総督府には何十万人ものユダヤ人を収容する余裕はなく、現地の責任者が受け入れを拒否したのである。当初一〇〇万人の移送を予定して始まったこの計画は、わずか八万人あまりを移送しただけで数ヵ月後に中止されている。

ドイツの勢力圏からユダヤ人を駆逐する計画は、その後も追放先をめぐって迷走を重ねていく。一九四〇年六月のフランス占領前後には一時期マダガスカル島への移送というプランが浮上するが、この空想的な計画もイギリスが制海権を握っている限りは実現の見通しが立たなかった。この間も当面の措置としてゲットーに留め置かれたユダヤ人たちは、飢えや病気に苦しむ極限的な生活を強いられ続けた。彼らはいつかどこかへ移送されるはずだったが、その具体的な行き先はなかなか定まらなかった。

こうしたなか一九四一年六月に始まった独ソ戦は、ナチスの反ユダヤ政策をさらに急進化させることになった。この戦争は対ポーランド戦以上に残虐きわまる絶滅戦争

で、ユダヤリボルシェヴィズムの殲滅を旗印に掲げ、将校・兵士だけでなく一般住民までも大量殺戮の対象とするものだった。特徴的なことに、ドイツ軍は作戦段階から食料の現地調達を見込んでおり、占領地域の数百万人の住民の餓死さえ想定していた（これは「飢餓計画」と呼ばれている）。ソ連軍の捕虜の扱いも苛酷をきわめ、戦争初期に捕らえられた数百万人の捕虜は強制労働を強いられた上、満足な食料も与えられずに収容所に放置されたため、多くが餓死している。「劣等人種」への敵意が、過激な措置を推進する原動力となったことは明らかである。だが絶滅戦争としての独ソ戦の本質をとりわけ如実に示しているのは、前線の後方で人種的・政治的な敵の掃討に従事した親衛隊・警察主力の特別行動部隊（アインザッツグルッペン）の活動だろう。人種主義的憎悪にもとづくその非情な殺戮の対象には、ソ連軍の政治委員やパルチザン、シンティ・ロマ、そして何よりもユダヤ人が含まれていた。

ドイツ軍が破竹の勢いでソ連への侵攻を開始すると、特別行動部隊はバルト諸国からベラルーシ、ウクライナ、ロシアの一部にいたる広大な地域に侵入し、ときに

現地住民からなる補助警察の協力も得ながら、各地でユダヤ人の組織的殺戮を実行していった。バルト諸国のいくつかの都市では、ドイツ当局の煽動で現地住民によるユダヤ人へのボグロムが発生したが、リガやミンスクのように、最初の虐殺の後に残ったユダヤ人を収容するゲトローが設置された都市もあった。特別行動部隊は各地で迅速に行動し、見つけられる限りのユダヤ人を虐殺した。当初は主としてユダヤ人男性に限定されていた殺戮は、やがて女性や子どもにも無差別に襲いかかるようになり、各地のユダヤ人コミュニティを根こそぎ一掃するなど、その苛酷さを増していった。この殺戮の被害は恐るべきもので、一九四一年末までの半年間で犠牲者は五〇万人に上った（最終的な犠牲者数は一三〇万人に上ると目されている）。各町村のユダヤ人は集団で郊外の処刑場に追い立てられた後、そこに掘られた穴のところで銃殺され、そのまま埋められた。なかでも最大の犠牲者を出したのが、四一年九月末の数日間で三万人以上のユダヤ人を殺害したキエフ近郊バビ・ヤールでの虐殺である。

だがこうした大量射殺はきわめて非効率で、数百万人のユダヤ人を掃討するにはあまりに原始的な方法と考え

られた。一九四一年八月にミンスクでユダヤ人の処刑を視察したヒムラーは、銃殺が部隊のメンバーに与える精神的負担の大きさに懸念を表明し、別のもっと効率的で負担の少ない殺害方法の検討を指示した。この指示を受けて開発されたのが、密閉された荷台に排気ガスを引き込んで搭乗者を殺害するガストラックである。「安楽死」作戦で用いられた技術を応用したこの移動式殺人装置は、特別行動部隊の展開地域で射殺と並行して運用された後、四一年末にポーランド西部のヘウムノ（クルムホフ）絶滅収容所に導入された。その後、四二年前半にポーランド東部に設置された三つの絶滅収容所では、固定式のガス室が殺戮に用いられている（そこではガス室に取り付けたエンジンの排気ガスで殺害が行われた）。

移送から絶滅へ（一九四一～四四年）

一方、ドイツの勢力圏にとどまるユダヤ人の問題は依然として未解決のままで、とくにポーランド各地のゲトローに収容された何百万人ものユダヤ人の処遇は焦眉の問題となりつつあった。一九四一年六月の独ソ戦の開戦

は、この状況に打開の糸口を与えるように見えた。緒戦の快進撃で早期の勝利が見込まれると、ユダヤ人をソ連占領地域に追放する可能性が拓け、あらためて計画全体の練り直しははかれるようになったのである。四一年七月末には帝国保安本部長官ハイドリヒがユダヤ人問題の全権を委任され、「最終解決」の構想を作成することになった。これと同じ頃、ヒムラーの指令でポーランドおよびソ連の占領地域を包括する「東方」の再編計画、いわゆる「東部総合計画」も策定されている。

こうした動きは、独ソ戦の勝利を待たずにドイツ国内からユダヤ人を追放しようとする圧力を高めた。一九四一年九月、早急な移送をもとめるナチ党の大管区長たちの声に押されてヒトラーがこれを許可すると、事態は一気に緊迫の度を増す。現地の受け入れ事情を無視したこの決定によって、ただちにユダヤ人の移送先を確保する必要があるが、戦争の状況は東方への移送を可能としておらず、ソ連占領地域の責任者も受け入れに難色を示したからである。一〇月にドイツ・ユダヤ人の移送が開始されると、リガやミンスクなどのゲットーでは収容スペースを空けるために多数のユダヤ人が射殺され

たが、新たな収容者をどう処遇するかという問題は、なおも未定のままだった。現地の責任者のなかには、ドイツからやってきたユダヤ人をソ連のユダヤ人と同じように殺害することはできないと異議を唱える者もいた。このような移送と受け入れの混乱から生じてきた諸問題を解決するために、多くの関係機関の間で全体的な調整が必要とされるようになった。そうした状況のなか四二年一月にユダヤ人問題の全権ハイドリヒが招集したのが、いわゆる「ヴァンゼー会議」である。

ユダヤ人問題の「最終解決」を協議するためにベルリン郊外で開催されたこの会議では、関係各省庁の次官たちが一一〇〇万人に上るヨーロッパ全域のユダヤ人絶滅の方針に合意し、その実施に必要な業務の調整を取り決めた。ドイツの勢力圏内のあらゆるユダヤ人を「東方」に送って強制労働に従事させ、労働不能な者を自然淘汰するという「労働を通じた絶滅」の基本方針が決定されたが、それは従来のユダヤ人追放政策が頓挫し、強制労働と組織的殺害へと転換したことを意味していた。会議の結果を受けて、数百万人のユダヤ人を抱える総督府の切迫した状況を早急に解決する圧力が高まることになっ

た。「労働を通じた絶滅」といっても、ユダヤ人をいつまで強制労働に従事させておくのかが問題となった。この点については、ユダヤ人の労働力が軍需産業にとって必要だという理由で殺害に反対する意見もあったが、ドイツの食料供給源として重要な意味をもつ総督府で何百万人もの「穀潰し」を養っておく余裕はないとの見解が、最終的に同地のユダヤ人の運命を決定した。こうしてポーランド東部の総督府で絶滅収容所の建設が始まり、いよいよ組織的殺害が本格化することになる。

一九四二年三月から七月にかけて、ポーランド東部の総督府にベウジェツ、ソビボル、トレ布林カの三つの絶滅収容所が建設され、順次稼働を開始した。これらの収容所の特徴は、固定式のカス室を備えたユダヤ人の殺害専用の施設だったことである。注目すべきことに、その建設には「安楽死」作戦のスタッフが中心的に携わっていた。四一年八月に国内世論の批判を受けて作戦が中止された後、それと入れ替わりにポーランドで任務に就いた彼らは、排気ガスによる殺害の技術をユダヤ人の大量殺戮に応用したわけである。そこで実施された工業的殺戮はまさに「死の工場」と呼ぶべきもので、その冷酷

さにおいて比類のないものだった。移送列車で収容所に到着した人びとは、殺戮業務を補助する特務班（ゾンダーコマンド）の要員に選ばれたごく少数の男性を除いて、ほぼ全員が荷降場からガス室に送られ、即座に殺害された。こうした迅速かつ機械的な殺戮プロセスは、犠牲者が労働力としての価値すら認められていなかったことを意味している。

これら三つの絶滅収容所で殺害された人びとの大部分が、周辺のゲットーから移送されたポーランド・ユダヤ人だったことも重要である。一九四一年後半には各地のゲットーは死者が続出する壊滅的な状態にあり、現地の責任者からは収容者を餓死させるよりも素早く片付けるべきだとの声が上がようになっていた。独ソ戦の膠着でソ連占領地域への移送の見通しも立たない状況のなか、行き場を失ったユダヤ人を組織的に抹殺するための作戦が始動することになる。このいわゆる「ラインハルト作戦」で設置された三つの収容所によって、最終的に一七五万人あまりが犠牲になったといわれる。いずれの収容所も四二年末から四三年後半にかけて順次閉鎖・解体されるが、そのわずか一年半あまりの間にポーランド

の地からほとんどのユダヤ人を消滅させた事実からして、これらがホロコーストの中核をなす施設だったことは明らかである。

一九四二年夏以降、ポーランド各地のゲットーから絶滅収容所へのユダヤ人の移送が本格化するようになる。今度はドイツ本国をはじめフランス、オランダ、ベルギー、イタリア、ルーマニア、ギリシアなどの占領国・同盟国からもユダヤ人が貨車で次々に移送されてくるようになった。このヨーロッパ全域にまたがる大規模な移送を取り仕切ったのが、三九年九月末から帝国保安本部でユダヤ人の移送を担当していたアイヒマンである。彼は運輸省や外務省などの関係機関と折衝の上で、無数の移送列車の運行スケジュールを策定した。これらの列車で移送されたユダヤ人は、水も食料も与えられずに何日もすし詰めの貨車で運ばれたため、目的地に到着する前に死亡する者も多かった。だが移送中に命を落とさなかった人びとも、そのほとんどはいずれ死を課される運命だった。多くの場合、ユダヤ人を満載した移送列車が到着した先は、アウシュヴィッツだったからである。

ポーランド・ユダヤ人の殺戮がピークを越えた後の

一九四三年初めから四四年末まで、ヨーロッパ・ユダヤ人絶滅の中核を担うようになったのが、アウシュヴィッツ強制収容所である。ポーランド南部に設置されたこの収容所は、単体で一一〇万人もの犠牲者を出した最大規模の施設だが、その特徴をなしていたのは何よりも、強制収容所と絶滅収容所の機能を兼ね備えた複合的性格である（はるかに規模は小さいが同様の施設として、マイダネク（ルブリン）強制収容所がある）。アウシュヴィッツはドイツ国内の六カ所に次ぐ七番目の強制収容所として、四〇年六月に主としてポーランド人政治犯を収容する目的で開設された（第一収容所）。だがその後、ソ連軍の捕虜やユダヤ人を大量に受け入れるのに伴って大幅に拡張され、四一年一〇月に第二収容所（ビルケナウ）、四二年一〇月に第三収容所（モノヴィッツ）が増設されている。このうち第三収容所は複合化学企業IGファルベン（合成ゴム・合成石油工場）に安価な労働力を提供する目的で設立されたもので、この工場の建設に従事する囚人を収容した。

他方、労働不能なユダヤ人を殺害するための専用施設を備え、絶滅収容所として機能していたのが第二収容所

である。この収容所ではすでに四二年七月から農家を改造したガス室で殺虫剤ツィクロンBを使った殺害が始まっていたが、組織的殺戮が本格化するののは四三年三月から六月にかけて四棟の大規模な複合施設（クレマトリウム）が建てられて以降のことである。これらの施設は脱衣所とガス室、焼却炉をあわせもち、殺戮から死体処理までを流れ作業式の工程に効率化・合理化している点で、ホロコーストの最終的な到達点を画したものといえる。さらに四四年五月には、収容所内まで延びる鉄道の引き込み線も完成し、各地から列車で到着した人びとを荷降場で選別して即座にガス室に送ることが可能になった。この引き込み線と荷降場は、その後の数ヵ月にわたるハンガリーからの大量移送に応じるべく設置されたものである。

一九四四年三月にドイツ軍がハンガリーを占領すると、アイヒマンはすぐに現地に飛んで同国に手付かずで残っていたユダヤ人の移送に着手した。彼の特務部隊はハンガリーの現地警察の協力も得ながら短期間で準備を進め、五月から七月のわずか二ヵ月あまりで四四万人ものユダヤ人をアウシュヴィッツに移送する。このとき移送

された人びとは到着後ただちに荷降場で選別され、大多数が直接ガス室に送られた。アウシュヴィッツでの殺戮は四四年十一月まで続くが、これがほぼ最後の大量移送となった。ポーランドに設置された六つの絶滅収容所で、あわせて三〇〇万人近いユダヤ人が犠牲になったと見られている。

アウシュヴィッツでのユダヤ人の組織的・機械的な殺戮は、それがあたかも明確で綿密な計画の産物だったかのような印象を呼び起こしがちである。だが以上に見てきたように、ナチスの反ユダヤ政策は当初から一貫して大量殺戮をめざしていたわけではなく、むしろ状況の変化に応じて軌道修正をくり返しながら、多様な要因の絡み合いのなかで徐々に急進化の度を強め、最終的に絶滅収容所での工業的殺戮へと行き着いたのだった。こうした「累積的急進化」は、アウシュヴィッツ強制収容所が開設後に大きく役割を変化させていったプロセスにも部分的に見出すことができるだろう。

もっともそうした紆余曲折のどの段階でも、ナチスがそのつど直面する問題を「合理的」に解決しうる方策を

選択していたことを見逃してはならない。絶滅という最悪の選択でさえ、ユダヤ人の排除という目標に対する最も実現可能で効率的な方策だったといえる。遅くともヴァンゼー会議の時点までには、ユダヤ人を地上から文字通り消し去ってしまうことが最も「合理的」な選択となっていたのである。ホロコーストを理解するための鍵は、そうした目的と手段の関係における「合理性」をどうとらえるかにあるといえるだろう。

田野 大輔（たの だいすけ）

一九七〇年、東京都に生まれる。京都大学大学院文学研究科博士後期課程（社会学専攻）研究指導認定退学。京都大学博士（文学）。現在、甲南大学文学部教授。専門は、歴史社会学、ドイツ現代史。著書に、『魅惑する帝国——政治の美学化とナチズム』（名古屋大学出版会、二〇〇七年）、『愛と欲望のナチズム』（講談社選書メチエ、二〇一二年）、『ファシズムの教室——なぜ集団は暴走するのか』（大月書店、二〇二〇年）などがある。

15分で読む ホロコーストはなぜ起こったか ブックガイド

出版社	ISBN (978)	書名	著者名	本体 価格	刊行
人文書院	4409230220	水晶の夜——ナチ第三帝国におけるユダヤ人迫害	H・J・デッシャー著、小岸昭訳	品切れ	1990
時事通信社	4788796317	ホロコースト——歴史的考察	マイケル・R・マラス著、長田浩彰訳	品切れ	1996
創元社	4422300320	ホロコースト全史	マイケル・ペーレンバウム著、石川順子・高橋宏共訳	品切れ	1996
三交社	4879191304	ヒトラーとユダヤ人——悲劇の起源をめぐって	フィリップ・ビューラン著、佐川和茂・佐川愛子共訳	品切れ	1996
法政大学出版局	4588006227	最終解決——民族移動とヨーロッパのユダヤ人殺害	ゲッツ・アリー著、山本尤三島憲一共訳	4700	1998
柏書房	4760124138	ホロコースト大事典	ウォルター・ラカー編、井上茂子・木畑和子・芝健介・長田浩彰・永岑三千輝・原田一美・望田幸男共訳	品切れ	2003
青木書店	4250203268	ホロコーストの力学——独ソ連・世界大戦・総力戦の弁証法	永岑三千輝	品切れ	2003
原書房	4562037261	ホロコースト全証言——ナチ虐殺戦の全体像	グイド・クノップ著、高木玲・藤島淳一共訳	3400	2004
大月書店	4272430697	近代とホロコースト	ジークムント・パウマン著、森田典正訳	品切れ	2006
中公新書	4121019431	ホロコースト——ナチスによるユダヤ人大量殺戮の全貌	芝健介	860	2008
柏書房	4760140978	ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅 [上巻]	ラウル・ヒルバーク著、望田幸男・原田一美・井上茂子共訳	6000	2012
柏書房	4760140985	ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅 [下巻]	ラウル・ヒルバーク著、望田幸男・原田一美・井上茂子共訳	5500	2012
柏書房	4760140930	ホロコーストを学びたい人のために	ヴォルフガング・ベンツ著、中村浩平・中村仁共訳	2300	2012
白水社	4560082379	ホロコースト・スタディーズ——最新研究への手引き	ダン・ストーン著、武井彩佳訳	3600	2012
春風社	4861104619	資料を見て考えるホロコーストの歴史——ヴァンゼー会議とナチス・ドイツのユダヤ人絶滅政策	ヴァンゼー会議記念館編著、山根徹也・清水雅大共訳	2000	2015
講談社現代新書	4062883184	ヒトラーとナチ・ドイツ	石田勇治	920	2015
中公新書	4121023292	ナチスの戦争 1918-1949——民族と人種の戦い	リチャード・ベッセル著、大山晶訳	960	2015
慶應義塾大学出版会	4766423501	ブラックアース(上)——ホロコーストの歴史と警告	ティモシー・スナイダー著、池田年穂訳	2800	2016
慶應義塾大学出版会	4766423518	ブラックアース(下)——ホロコーストの歴史と警告	ティモシー・スナイダー著、池田年穂訳	3000	2016
みすず書房	4622086284	新版 エルサレムのアイヒマン——悪の陳腐さについての報告	ハンナ・アーレント著、大久保和郎訳	4400	2017
ちくま学芸文庫	4480099204	増補 普通の人びと——ホロコーストと第101警察予備大隊	クリストファー・R・ブラウニング著、谷喬夫訳	1600	2019
岩波新書	4004317852	独ソ戦——絶滅戦争の惨禍	大木毅	860	2019

本棚から考える 「読書の学校」

三砂 慶明（梅田 蔦屋書店 人文コンシェルジュ）

梅田 蔦屋書店の店頭で「読書」をテーマにした「読書の学校」（隔月開催）という小さなフェアが続いています。なぜ、そんなことをはじめたかといえば、本屋で本が売れる理由を考えたときに、その解の一つはおそらく、手に取る人の「読みたい」だと考えたからです。では、本を読む人の、「読みたい」を育て、読書の火を灯すにはどうしたらいいのでしょうか。自分なりに考えて、たどりついた結論は、お客様と話してみる、でした。

梅田 蔦屋書店はＪＲ大阪駅直結の駅ビルの９階にある書店です。カフェやコワーキングスペースを併設したライフスタイル型「BOOK & CAFE」です。店内は楕円形に書棚が配列されており、棚から棚への並びは、お客様に本棚の前を歩いてもらったときに物語を感じてもらえるように設計されています。

２０１５年の開店から半年ぐらい経ったときに店内に併設しているカフェの店長から、「読書会はやらないんですか？」ときっかけをいただきました。読書会に参加したことも、見たこともなかったのですが、話を聞いたときにまずやってみようと思い立ちました。人前で話した経験もなく、話したいと思ったこともなかったのですが、なぜか「読書会」という言葉がすんなりと腑

に落ちて、店内でも試験的にやってみようと話がすすんでいきました。

声をかけてくれた併設するカフェの店長が、終始気にかけてくれ、読書会のはじめに試飲のコーヒーをだしてくれたり、場をなごませてくれました。読書会をはじめてみてわかったのは、どうやって告知をして、何を話したら、お客様に楽しんでもらえるかがわからないということでした。興味本位で参加したり、立ち止まって見守ってくれたりするお客様と話していくうちに、次のテーマがみえてきました。読書会と一緒に始めてくれた同僚たちと試行錯誤しながら続けていくうちに、一人から二人、三人とお客様が増えてきました。

医療の現場にたずさわるお客様や、学生時代から定年されるまで独学でマルクスを研究されてきたお客様、学生時代から就職し社会人になっても通い続けてくださる常連のお客様など、顔と名前が目に浮かぶお客様が増えてくるにつれ、お客様からも手伝いたいと嬉しいお声がけをいただきました。クリスマスに『クリスマス・キャロル』を朗読してみたり、バレンタインにフロムの『愛するということ』を読んだり、会を重ねていくうちに、物足りなくなってきたお客様から、著者の先生をお招きできないか、とリクエストをいただきました。たまたま営業で来店されていた化学同人の坂本亮さんにたずねてみると、「なんとかしてみます」と思いがけない返事をいただきました。

第1回のゲストにご来店いただいたのは、仏教学者の佐々木閑先生でした。ご登壇いただくまでに、先生の著作を全部読んでおこうと読みはじめたら、いきなり仏教学にハマってしまいました。中でも衝撃的だったのが『科学するブッダ——犀の角たち』です。仏教の本でありながら、『物理学』からはじまり、『進化論』、『数学』、そして『釈尊』、『仏教』、『大乘』へと広がっていく展開

にはめまいがしました。科学と仏教。一見、無関係にみえるこの二つの山脈に、真理という橋をかけてくれる先生の言葉に感動しました。読書会では、『科学するブッダ』をさらに発展させ宇宙へとスケールを広げた続刊『仏教は宇宙をどう見たか——アビダルマ仏教の科学的世界観』（DOJIN選書）についてお話しいただきました。エベレストの山のように、はるか高くにそびえる仏教の高峰を、私たち一般登山者が一緒に歩けるようにやさしく、丁寧に、かつ厳しく手ほどきしていただきました。先生の話をも熱心に聞き、メモをとってくれたお客様から、「疲れたけど大変面白かった。またやってほしい」と感想をいただいたのが大きな励みになりました。

続いて登壇してくださいましたが、脳科学者の藤田一郎先生です。佐々木閑先生のご紹介でした。シナプスがつながって思考が生まれる瞬間と考えられる画像や、ロシアの最先端のVRの研究、さらには錯視の実験など、人間の盲点を実際に体験できるまたとない一夜でした。今も忘れられないのは藤田先生から読書会が終わった後に頂戴したコメントです（写真1）。

先生の言葉で、書店は一冊の本にかかわるすべての人が交差する場なんだと改めて気づかされました。常連のお客様と、藤田先生から頂戴した言葉について雑談していたら、「それって読書の学校みたいだね」と言われて、我が意を得たりと思いました。以来、コロナ禍に見舞われるまでは、同僚たちと一緒に本の魅力を体験できるイベントを開催し続け、年に100回程度、延べ3000人前後のお客様が参加する読書会に成長しました。

続けてきてわかったのは、講師と生徒の関係ではなく、著者の人間性や研究者の情熱に読者がふれたときに化学反応が起こる、ということでした。ご登壇いただく先生が身を乗り出して語りはじめたとき、その情熱は観客にも伝播します。知らないことを知る喜びは、トークショーが終



写真1 読書会后、藤田一郎先生からいただいたコメント
(2016年8月28日(日) 梅田 蔦屋書店
コンシェルジュカウンターにて開催)

わった後のお客様の表情にはつきりと表れていました。並べた本を真剣に吟味し、奪い合うように目の前で買ってもらえるのは、喜び以外の何物でもありませんでした。伝わったと思います。では、この感動を本棚で実現するにはどうしたらいいのか。

漠然と考えていたときにヒントを与えてくれたのが平凡社の清田康晃さんでした。清田さんからいただいたのが、「現代の哲学の棚は一体誰のための書棚なのか」という問いです。

人生でもっとも貴重な資源は時間です。学生なら哲学を学ぶためにプラトンから読めるのかもしれませんが、日々仕事や家事をしながら哲学史を学びなおすのは不可能に近いのではないかとあれば、人文書の書棚はもっと自由に、21世紀を生きる私たちの悩みや不安と向き合ってもいいんじゃないか。

清田さんの言葉がきっかけで、日常生活から人文書を眺めたらどう見えるのか、を自分なりに考えてみました。

なぜ、私たちはつながらずにはいられないのか。

人間の根幹である、食べることは一体なんなのか。

読み継がれてきた古典が、今もし生まれているとしたら現代の古典とはなんだろう。

今この世にいる私たち全員がいなくなった先の100年後に私たちは何を残せるのか。

一体、人間とはなんなのか。

頭の中で、問いが大きく膨れ上がり、しかしながら、自分にはこの問いに答えられる知識がない。しかし、専門書の版元の皆様の力を借りることができれば、その問いに答えられるのかもしれない。小さな問いに本で答えてもらう選書フェアができないか。版元の皆様に相談すると「やってみましょう」と温かいお返事をいただいただけでなく、そういう企画ならあの人にもお声がけした方がよいとの導きもいただきました。

フェア自体は、店内の人文コーナーにある棚一本を使って、隔月で開催しました。版元の皆様から寄せてもらった推薦文があまりに素敵だったので、オリジナルの帯を作り、推薦文を持ち帰ってもらえるように無料のリーフレットも作成しました(写真2)。1年目は、「読者から読者へ」と題し、2年目からはお客様の言葉をいただき、「読書の学校」と装いを新たに地道に続けていきます。嬉しいことに、無料のリーフレットは毎月300人前後のお客様が楽しみに待っていてくれました。小学校の先生が授業で配布してくださったり、ラジオでリスナーの方が紹介してくださったり、わざわざ福岡のブックバーひつじが様が毎号、店頭に飾ってくださったりと、



写真2 推薦文を掲載した「読書の学校」の無料リーフレット

少しずつ広がっていきました。小さな手作りの冊子でしたが、お客様から読んだよ、と店頭で声をかけてもらえるのも大きな励みになりました。

何より嬉しかったのは、多忙な業務の隙間をぬって小さな選書フェアのためだけに、毎号、選書や推薦文を快く寄稿してくださった版元有志の皆様の本に対する愛情です。同じ問いを投げかけても、選書が重ならなかったのには驚きました。やはり専門家は違うなど、感銘を受けました。フルマラソンのように、延々と同じ道を走り続けてくださった版元の皆様には、感謝の言葉しかありません。相談に乗っていただいたり、それぞれの先生との橋渡し役となっていたいただいた後述の出版社の方々にも、この場を借りて心から御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

亜紀書房・橋本博人様／朝日出版社・橋本

亮二様／140B・青木雅幸様／NHK出版・加藤剛様、加納展子様／化学同人・後藤南様、津留貴彰様、中田峰晃様／サンガ・五十嵐幸司様／CCCメディアハウス・田中里枝様／人文書院・佐藤良憲様、浦田千紘様／新曜社・清水檀様／世界思想社・中川大一様、望月幸治様、泉雅貴様／創元社・浅山太一様、岩田桃子様／田畑書店・大槻慎二様、今須慎治様／平凡社・清田康晃様／みすず書房・佐々木久美子様／遊泳舎・望月竜馬様／有斐閣・四竈佑介様／よはく舎・小林えみ様（社名五十音順）

4年目を迎える2020年12月からは、「読書の学校」の装いを新たに、隔月ごとに校長先生



写真3 「読書の学校」選書フェア。
2020年12月から第3期に。
第1回は「書くこと+食べること＝
生きること」をテーマに開催

をお迎えし、一つのテーマにより深く踏み込んでいきます。

第1回は、朝日新聞の名物記者・近藤康太郎先生の新刊『三行で撃つ——〈善く、生きる〉ための文章塾』の刊行を記念し、「書くこと＋食えること＝生きること」をテーマにした選書企画を行います（写真3）。本だけでなく、近藤先生が、『おいしい資本主義』などの近作で描いている、ご自身で育てかつ収穫したお米やコクテイル書房・狩野俊氏と一緒に開発する「文学カレー・近藤康太郎」、さらに先生が執筆される際に使う抜き書き帳や万年筆なども展示しています。読んでもらうだけでなく、一冊の本が生まれる背景を、文字通り丸ごと味わってもらえたら大成功です。



筆者 近影

本は身近でありながら、新しい世界の扉を開いてくれる四角い窓です。本をひらけば、時間も場所も関係なく、未知の世界が広がります。何を選ぶか、通りすぎるかはあくまで読者にゆだねられており、その選択肢はほとんど無限です。行き詰まったときや、乗り越えられそうにない困難にぶつかったときこそ、本はその力を発揮するような気がしています。私自身、本に何度も人生を助けてもらいました。だからこそ、読者の人生の節目節目でその人の背中をささえてくれる本や、世界観を根底からくつがえし、人生をより自由にしてくれる本を、店頭から届けられたら、こんなに嬉しいことはありません。大阪にお越しの際は是非、梅田 蔦屋書店にもお立寄りくださいませ。

三砂 慶明（みさぎ よしあき）

授業で学校図書館を活用する

—— 体育の授業で本を使う（豊田市立萩野小学校の実践から）

塩谷 京子（放送大学客員准教授）

1 はじめに

「調べる」という言葉が頻繁に使われるようになって20年が経つ。この間に、知りたいことがあれば、いつでもどこでも即座に情報を入手することができる生活環境が整った。私たち大人だけでなく学校に通う子供も、メディアの種類、発信元（公的か私的か）、さらには、文字情報と動画情報などを使い分けながら、目的に応じた情報収集を日常生活の中で当たり前のように行っている。

このような環境で育っている子供が授業で学校図書館を活用するとき、目を輝かせているのはどういふ場面な

のだろうか。そもそも、教師が授業で学校図書館を使うのはどのようなときだろうか。コロナ禍において、デジタル教科書やタブレットの導入など、ICT環境が急激に整い始めた今日だからこそ、学校図書館を活用した授業のレポートを通して、子供の学びの姿を捉えてみたい。

2 どんなとき教師は授業で学校図書館を使うのか

教師は、全ての授業時間に学校図書館を使うわけではない。学校図書館をあえて使わなくても、授業は進む。教師が、授業で学校図書館を活用したいと判断するとき、

その目的は大きく3つに分類される。

まず、読書を楽しんでほしい、読書を通して読む分野を広げてほしいなど、読書活動を通して、子供に読む力をつけたいと考えるときである。例えば、子供が面白かった本を紹介し合った後、興味のある本を手にとってみたいと思うとき、物語文を学んだ後、同じ作者の本を読みたいと思うとき、学校図書館を使う。

次に、授業のねらいに到達するために、図書館の資料を活用する場合がある。例えば、百科事典や年鑑などを使うことにより、用語の定義や数値からものごとを捉えることができる。デジタル資料や新聞などを使うことにより、今の情報に出合うことができる。パンフレットやリーフレットなどを使うことにより、地域に沿った学びが展開できる。このように、図書館にある様々な資料を使うことにより、子供が授業のねらいにより到達しやすくと考えるとき、学校図書館を使う。

さらに、図書館の資料を使って調べることにより、調べて答えを導くだけでなく、目次・索引の使い方や百科事典の引き方を身につけることもできる。調べることに留まらず、調べたことをもとに気づいたことや考えたこ

とを整理したり、まとめて表現したりすることへと繋がる。このような活動を繰り返すことを通して、情報を活用するスキルを効果的に育成したいと考えるとき、学校図書館を使う。

このように、目的は大きく3つに分類される。いずれの場合でも、授業を組み立てる教師が、「学校図書館を使った方が子供のためにより良い！」という判断が、そこに必要になる。判断をするためには、漠然とはしていても自分の学校の図書館の整備状況がイメージできていなければならない。このように図書館と教師、さらには子供を繋ぐ役割を担っているのが、司書教諭である。司書教諭は教師であるため、日々授業を行っている。そこで、多くの学校の図書館には、専ら図書館業務を担当する学校司書が置かれている。

3 どのような体育の授業を目指しているのか

豊田市立萩野小学校（吉田修校長）は、豊田市の北部の山間地にある、児童数25名、学級数4学級、教職員数10名（学校図書館には学校司書が配置）の学校である。今回の図

書館レポートでは、複式学級3・4年生の体育「マツト運動の後転」の授業を紹介する。

体育といえば実技、実技といえば図書館は関係ないと思うかもしれない。しかし、担当の伊藤先生は、ただ練習を重ねてできるようになるのではなく、子供が自分の課題を解決する体育の授業を目指している。このとき、「本(学校司書に選書してもらっていた)、そして、ICTは必要だ」と語る。

教師は、授業の前後の子供の姿を描き、どういう子供が何を学んだのかを念頭において授業を組み立てている。伊藤先生の頭の中には、「授業前……」なんとなく後転ができている子供が、(……授業後自分で自分の後転の課題を見つけ、映像や本で気をつけるポイントを探したり、グループでアドバイスしながら練習を繰り返すことを通して、自分の課題を解決することができる)という、子供の学ぶ姿のイメージがあった。

これは、授業デザインの根幹部分である。授業を通して子供が学んでいくために、この時間では、2つの活動が設定されていた。一つは、気をつけるポイントを「映像」や「本」で探して練習を繰り返し、自分の課題を解

決する活動である。もう一つは、グループでアドバイスしながら助け合って練習を繰り返し、自分の課題を解決する活動である。

いずれも、子供が、主体的・対話的に取り組み、自分の課題を自分で解決することができるように、教師が設定した活動である。しかしながら、教師の願いを込めた活動の設定であっても、子供の気持ちが高まらなければ、与えられた作業をこなして終わってしまうことになりかねない。子供の気持ちを活動へと連れていくためには、導入段階において、仕掛け、そして問い(課題)が必要になる。これがないと、たとえ活動を設定したとしても、自分から問い(課題)を解決していこう、学ぼうという気持ちは生まれにくいからだ。

このような導入段階での仕掛け・問い(課題)の後、展開段階での複数の活動へと移る。全ての活動が終わったところで、まとめ段階での振り返りとなる。最近の学校では、子供が学ぶということを重要視しているため、教師が説明して終わるという授業はほとんど見られない。

4 どのように体育の授業を進めているのか

図1は、体育の授業が始まる時の様子である。授業は、ワークスペースで行っていた。ワークスペースの右側は教室、左側は図書館である。グループ学習をするときに使うための長いマット2枚を含め、子供の人数と同じ6枚のマットが用意されている。手前のテーブルには、1人1台のタブレット端末と、数冊の本がある。タブ



図1 体育の授業の開始時の様子



図2 授業の導入時の様子



図3 練習することを決める子供

レット端末は自分の演技を即座に動画で確認するために、数冊の本は技のポイントを調べるために使っていた。いずれも、子供が自分の課題を解決するために必要な情報を収集するための準備である。

図2は、挨拶の後、全員を集めて行った授業の導入の様子である。通常、教室に黒板や電子黒板があるように、ワークスペースでも子供の学びを助けるために3つのホワイトボードと1つの電子黒板が並べてあった。右から、①「単元の中の今日の授業の位置」、②「良い後転と良



図4 演技をタブレット端末で見る子供



図5 本で見つけたことを先生に話す子供



図6 友達と学ぶ場面を確認する

くない後転を比較できるように2つの動画が映る電子黒板」③「今日のめあてと後転の動作を連続して示した絵」、そして、④「この単元で使う複数の用語」、この4つを使って、導入が始まった。これらは、それぞれ異なる目的がある。①は、単元の全体と今日の部分を子供が把握することで、学びの見通しをもつために使っている。②は、2つの後転を比較している。比較して気づいたことを、④の言葉を使って、③の連続動作の絵に貼っている。つまり、2つの後転を見て気づいたことを、この単

元で使う言葉に置き換え、それは、連続動作のどこのことなのかを、子供は繋げて説明しているのである。子供は、示された練習のポイントの中から自分の課題を決め、ネームプレートを貼り、練習を始める(図3)。ここから、授業の展開に入る。練習したらその都度タブレット端末で確認し(図4)、できていたらネームプレートに移し、次の課題に向けて取り組む。これを繰り返しているとき、一人の子供が、本に手を伸ばした(図5)。練習してもうまくならないので、練習ポイントを詳しく

知りたかったからである。今日の授業までにこの単元で使う言葉を繰り返しているので、子供は本に書かれていることを、理解することができる。

このように個人練習が進んだとき、伊藤先生は、全員をホワイトボードの前に集めた(図6)。互いの演技を見合ってアドバイしたり、練習方法を工夫したりするなど、協力して練習する必要があるからである。そこにはたくさんポイントが集まっている。グループでの学びの必要性を感じた子供は、マットに戻り声を掛け合い、アドバイスしながら、練習に取り組んでいた。

最後は、授業のまとめと振り返りの時間である。振り返りカードには、友達にどんなアドバイスをしたのかを記入していた。一番左のホワイトボードに貼られていた④「この単元で使う複数の用語」を、導入時から始まり展開での個人練習、グループ練習、そして、最後の振り返りまで、子供は何回も使っていた。

萩野小学校での体育の授業では、子供がよりきれいな後転をするためのポイントを探したいと思ったときに、自分で探せるように、「動画で記録された映像」と「本」が用意されていた。そのとき、知りたいと思ったことと、

調べたことが言葉として繋がり、さらには、後転という動作へ繋がる必要がある。しかしながら、授業で使う用語は、日常使う言葉とはかけ離れている場合が多く、体育の授業でのみ使うことがほとんどである。だからこそ伊藤先生は、導入段階で、単元で使う言葉を用意し、授業の中で何度も使う場面を設定していたのである。

このような教師の意図なくして、ただ単に、「本」を用意しただけでは、子供は手に取らないだろう。子供が、本を手に取り、読み取り、何かに気づくためには、授業をどう組み立てるのかという授業デザインが必要であり、それに沿った「本」を提供する学校司書の存在は、なくてはならないと考える。

5 どのように学校図書館を使うのか

図書室と図書館、学校では両方とも使っている用語である。「図書室」と言うときは、もちろん本が置いてある部屋を意味している。図書館を活用すると言うが、図書室を活用するとは言わない。図書館を活用すると言うときには、図書館という「場所」を使って授業をする、

本・新聞など図書館の「資料」を使って調べる、図書館にいる「学校司書」に尋ねる、図書館の「機能」(読書センター・学習センター・情報センターの3つの機能がある)を活用するなどがあげられる。

例えば、授業レポートをした体育の授業では、図書館という「場所」は使っていないが、授業のねらいに到達するために「本」も使った方が子供にとってより良いと判断し、学校図書館のもつ「学習センター機能」を使った授業を組み立てていた。だから、図書館の「資料」を使って調べるといいう使い方をしている。加えて、それらの「資料」は図書館にいる「学校司書」に選書してもらっている。本が並んでいればいいというわけではない。子供の学びとどこが繋がるのかを視野に入れた選書は、教師が授業を組み立てる上で重要な助けになっていることがわかる。

授業によっては、学校図書館という「場所」を使って授業をしたいと教師が考えることもあるだろう。しかし、授業時間に図書館と教室を移動するとなると、図書館の場所によってはかなりの時間がかかってしまうこともよくある。「図書館の資料を使って情報収集ができ、その

後、比較分類、関係づけて考えたり、まとめて伝えることまで、図書館でできたら、教室と図書館の行ったり来たりがなくなるのに」という、教師の声を聞くことがある。教室に、電子黒板やプロジェクトタとスクリーンが設置されるようになると、これらを使った授業が日常となる。図書館の資料を教室に持ってくる場合は、授業の流れに支障はないが、図書館に行つて授業をするとなると、不便が生じる。このような教師の願いを現実のものにする動きとして、電子黒板、実物投影機、プロジェクトタ、さらにはタブレットなどのICTが整っている図書館が見られるようになってきた。教師は、教室で授業をするのと同じ要領で進めることができる。学校図書館という「場所」を使うという視点から見ても、学校図書館の環境づくりについては、今後改善したいことが多くある。

また、授業によっては、45分のある部分で、「学校司書」に図書館の使い方や分類について説明してほしいと教師が思うこともあるだろう。そのとき、「学校司書」の専門的な知識を授業で生かすことは、従来から行われてきた。「学校司書」の職務の内容は、図書館の整備、授業支援、子供へのレファレンスなど、多岐にわた

る。萩野小学校の教頭である玉腰先生は、「学校司書の杉浦さんが、この本をこの単元で使えますよと紹介してくださるので、教師の授業づくりのイメージが広がります」と話していた。学校司書の継続した授業支援により、今では、図書館資料を使った授業は、日常的になっている。教室のブックトラックに置かれた本は、一冊一冊が吟味されており、授業内容と繋がっている。「学校司書」は、学習内容や子供の実態を把握した上で、適切な選書を行っている。一見地味ではあるが、子供の情報収集するスキルの向上、子供の読む力の育成に大きな影響を与えていることが、体育の授業レポートからも見える。子供が、後転の練習をしながらも、短時間で本を手に取り、必要な情報を探することができるのは、普段から繰り返し図書館資料と接しているからである。

6 どのように図書館の資料を使うのか

教師は、事前に導入・展開・まとめという授業の流れを組み立てて授業に臨む。授業の中で、どのように図書館の資料を使っているだろうか。最近では、45分という

授業時間全てを「図書館の資料を使って調べること」に費やす授業は、あまり見なくなった。萩野小学校での体育のように、目的に応じた使い方をしている授業をよく見かける。学年や教科、そして単元の内容、子供の実態、教師の願いにより、多様な使われ方があるだろう。ここでは、そのイメージを広げてみたい。

まず、紹介するのは、情報収集の際、情報源を複数用意するという使い方である。萩野小学校の体育の授業例のように、「動画」と「本」というように情報収集する方法を並列し、目的に応じて選択する場面を設定する使われ方である。

もう一つ紹介したいのは、1時間の授業ではなく、一つの単元として、情報収集の方法を並列している使い方である。例えば、4年生が社会科見学として消防署に出かける。その前後に、消防署に関する本を教室に置いておくと、いつでも自由に手に取ることができる。「見学」と「本・パンフレット」という複数の情報源から情報収集をすることにより、見学したことと本などに書かれていることを繋げて考え、そこから気づきが生まれる。1年生が生活科であさがおを育て観察するときも、教室に

あさがおの本が並んでいる。「観察したこと」と「本で読んだこと」を子供は繋げることが出来る。以前から、社会科学や理科、生活科では、見学したり、観察・実験したりすることを組み入れてきた。学校の図書館に置かれている資料が充実することにより、「見学先で見たり聞いたりしたこと」「実験・観察で自分が試したこと」と、「本などに書いてあること」を繋げて考えることが出来る環境を、教師は設定できるようになった。

次に紹介したいのは、単元の導入で、単元で理解する概念をよりイメージしやすくするために、読み聞かせを行ったり、映像や写真を見たりする使い方である。例えば、社会科学で憲法を学ぶときに、憲法の役割の理解を補うことを目的として、教師は『おりとライオン』を読み聞かせしていた。憲法を「おり」、権力を「ライオン」に例えてお話が進むので、小学生でも立憲主義のしくみをイメージしやすい。また、理科の植物のつくりと働きを学ぶときに、『時間の森／＼屋久島』の写真絵本を読み聞かせする。すると、子供は、「どうして、こんなに大きくなるの?」「どうしてこんなに長生きできるの?」と、問いをもち始める。問いをもつと、「水が関係して

いるのかな?」などと予想を立て始め、子供の学びは主體的になっていく。

このように、授業では、目的に応じて、図書館の資料を使っている場面によく出合う。しかし、気をつけていないと、見過ごしてしまうほどのちょっとした使い方である。こうした日々の授業の中に、意図的に図書館資料の活用を組み込むことは、子供の視野を広げ、概念形成を助け、興味関心を抱くなど、多様な効果が期待できる。

7 終わりに

授業での学校図書館活用の様子を、豊田市立萩野小学校のレポートをもとに紹介してきた。子供が持っている国語の教科書を開くと、ところどころにQRコードがある。そのQRコードを読み取って落語の動画を視聴できたり、動物の写真を見て確認することができたりする。その場で、知りたいことを調べることができるようになっていく。

このように情報収集の方法が加速度的に多様になっている今日、調べたことを比べたり繋げたりして考え、気

づき、予想したり、確かめたりすると、子供が「先生、ここに書いてある！」と教師に知らせに来る場面によく出合った。見つけたことや気づいたことは、誰かに伝えたくなるのだろう。そこから、友達との対話へと進み、新たな問いを見出し、子供が自分から動いているのが印象的だった。

萩野小学校は、山間地の小規模校である。少ない人数での関わりが日常だからこそ、先生方は授業を組み立てるとき、子供と本との繋がりを大切にしてきた。選書された本からの情報は、子供の気持ちを揺さぶり、問いや気づきを生んでいる。さらに、友達とのコミュニケーションの媒体となっている。子供は、本の中に留まっていなかった。日常生活へ、さらには社会生活へと向かっていった子供の目線が、レポート後の今でも鮮明に蘇る。

パルマケイア叢書から叢書パルマコンへ

二〇一九年十一月十三日の午前十時頃、創元社の五階編集局に宅急便の配達員が、岐阜の太平洋社からの荷物を届けに来た。ダンボール函の中身は、待ちに待った叢書パルマコン最初の本、『大衆の強奪——全体主義政治宣伝の心理学』の見本である。

製作担当が納品書を抜き取るよりも先に封を解き、見本を手にとると、思ったよりも軽い。並製だけど開きもいい。組版も読みやすいじゃないか！ ひとり悦に入り、つい笑みがこぼれてしまう。検品作業は残っているものの、初めて少し安堵する瞬間である。定型に近い並製本は束見本を作らない決まりなので、仕上がりの感触がどんなものか、この時までではっきりとは分からないのである。

山口 泰生（創元社編集局）

それから一週間後、定価三八五〇円、初版一七〇〇部の『大衆の強奪』は、無事書店に並んだ。



新シリーズ誕生のきっかけは、同年のある日の会議で決まった新方針だった。その会議で、今後、単独で出す必然性や特別な理由のない新刊は、なんらかのシリーズとして作るように、というお達しが下ったのだ。理由はほかでもない、もがけばもがくほど底なし沼にゆっくりと沈んでいくかのような出版界全体の苦境への比較的内容な対処のためである。反論の余地ない正論だ、従うしかない。

だが、その時の私には、脱稿が近いはずのシリーズに

入っていない進行中企画があった。京大教授のメディア史家佐藤卓己氏による、セルゲイ・チャコティン著『大衆の陵辱（仮題）』の単独訳企画がそれである。通常の流れて言えば、自社既存の比較的間口が広い学術書シリーズに入れるのが、新方針下での本筋であろう。

ところが、何日いや何週間経っても、それでよいとは思いきれない。でも、もうすぐ原稿は出来てしまう。追いつめられたある日、およそ十一年前に「そうか、これは大阪に行けという啓示なんだ！」と悟った時以来の天啓が、曇った頭脳に稲妻のようにひらめいたのである。

「新しいシリーズを作ればいいんじゃないか！」

誰でも思いつくことではあろう。しかし、後から思えば単純なことでも、悩んでいる時には本当に天の声に感じるものだ。おまけに、吹っ切れた眼で改めて自分の採択済み企画を並べると、そのうちの何本かは無理なくシリーズとしてまとめられそうな気もしてくるから面白い。これなら、新シリーズ企画も提案できると、確信を強めていった。

新シリーズを作ることは決めた。でも、新たなシリーズとして社内の企画会議を再び通過させるためには、シ

リーズ名とシリーズとしての分かりやすい売り文句が不可欠である。じゃあ、どうするか。



そもそも、佐藤卓己氏によるチャコティン本翻訳企画には、結構長い前史がある。その始まりは、細川連立内閣が誕生した年である一九九三年の一月十八日月曜日までさかのぼる。その日の午後二時少し前に、東大本郷の社会情報研究所八階に降り立った二十七歳の私は、同じ階にある研究室で、前年暮れに弘文堂から処女作『大衆宣伝の神話——マルクスからヒトラーへのメディア史』を刊行して間もない、三十二歳の佐藤氏に初めてお会いしたのだった。

そして、早くも翌年二月に、当時勤めていた柏書房から出版したのが、佐藤夫妻の翻訳による、ジョージ・L・モッセ著『大衆の国民化——ナチズムに至る政治シンボルと大衆文化』なのである。じつはこの時すでに、私はチャコティンの名前と代表作のことは知っていた。なぜなら、『大衆宣伝の神話』の中で佐藤氏は、チャコティンについてかなりの頁を使って論述していたからで

ある。

『大衆の国民化』を出版する際、私は新シリーズを立ち上げた。その名をパルマケイア叢書という。佐藤氏に勧められて手に取った桜井哲夫氏の著書『知識人の運命——主体の再生に向けて』（三一書房）で紹介されていたジャック・デリダの著作の記事内容に借りたものだ。パルマケイアは薬の語源に通ずる古代ギリシャの毒泉の精霊の名で、その水を飲んだものは死ぬという言い伝えがあるということだった。その後、パルマケイア叢書は「薬にして毒」をキーワードにして、佐藤氏の知恵を大いに借りながら冊数を重ねていったのである。



パルマケイア叢書命名に関わるデリダの著作は、二〇一三年に法政大学出版局から出版された『散種』に「プラトンのパルマケイア」として、はじめて全訳が収録されていた。私は、新シリーズの命名に悩みつつ、デリダの著作には分かりやすい（気がする）その訳文をポツポツ読みながら、チャコティン本がパルマケイア叢書に入っていたとしても全然おかしくはないものであ

ることを改めて実感していた。と同時に、新たなシリーズに入れようとしている著作を束ねるキーワードに「薬にして毒」をあてることの妥当性を強く感じはじめてもいたのだった。

でも、同じ名前は道義的にもあり得ないし、でも、関連性は分かる人には分かるぐらいにはしてもいいのではないか、と思ううちにくっきりと浮かんできた用語が、薬学・薬局の語源であり、薬にして毒の意味も持っていたとされる「パルマコン」であった。そして、今度は叢書の字を頭に持ってきて、新シリーズの名称を、「叢書パルマコン」に仮決めたというわけである。

無事、企画会議も通過した叢書パルマコンの装丁・造本は、ロバート・D・パットナム著『われらの子ども——米国における機会格差の拡大』の装丁もお願いしたグラフィックデザイナーである森裕昌氏に依頼した。森氏には、白を基調として、パルマケイア叢書っぽい雰囲気を残しつつ、また一味も二味も違う風合いの装丁ラフ及び組版フォーマットを作ってもらった。本文級数も、パルマケイアは13級で、パルマコンは13・5級、私も目が悪くなったのである。

ようやくこれで、入稿の準備は整った。



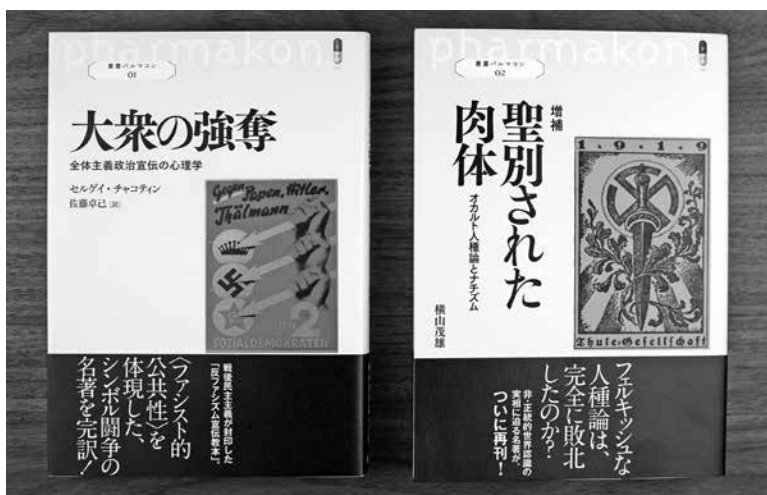
モッセの『大衆の国民化』が、ファシズムを民主主義の例外情況と規定する、戦後の一般的な民主主義理解の行き詰まりにやや先んじて棹差していたように、チャコティンの『大衆の強奪』も八十年前の著作ではあるが、昨今の欧州の極右政党躍進やポピュリズム政治の流行など、国民主義的民主主義の陥穽に棹差したものである。くわしくは、佐藤氏の二十七頁にわたる長文解説にゆずりたい。また、長崎^{れお}朗氏の産経新聞書評(二〇二〇年二月二十三日朝刊)での「本書の醍醐味は、後半、反ファシズム運動を展開していたはずのチャコティン自身がファシスト的な思考に陥っていく点にある」という指摘は、この本の特色をよくつかんだものだ。

そんなシリーズの無事なスタートを喜んでいる間もなく、二冊目、三冊目の脱稿が至近に迫ってくる……はずだった。が、脱稿間近なはずの原稿が、蜃気楼のように遠くへと逃げていくのだ。ままならぬもの、それは一にも二にも原稿である。



窮地を救うことになるのは、シリーズ立案後に企画を通した、奈良女子大学の名誉教授にして稲生平太郎^{いひゅう}名で小説も書く横山茂雄氏著作の増補復刊である。横山氏と知り合ったのも、佐藤氏に教えてもらった『聖別された肉体』がきっかけであった。一九九〇年に書肆風の薔薇から出版された孤高のオカルト史論は、じつはモッセの著作 *The Crisis of German Ideology: Intellectual Origins of the Third Reich* (その後、パルマケイア叢書より『フェルキッシュ革命——ドイツ民族主義から反ユダヤ主義へ』と題して出版)にも刺激を受けながら書かれた著作だったのである。

近鉄学園前駅近くの洒落た喫茶店で、横山氏に初めて会ったのは、『聖別された肉体』が刊行されてまだ数年しかたっていない頃だ。その後の二十余年の歳月は、同書をオカルト研究の孤高の古典へと熟成させた。新たに図版や解説などを加え、装丁イメージも一新して、『増補聖別された肉体——オカルト人種論とナチズム』として、叢書バルマコンの二冊目は無事刊行することができたのである。



パルマケイア叢書を立ち上げた頃、これも佐藤氏との会話の中で話が出ていた、ドイツ文学の研究者である池田浩士先生に、廃止直前の京大教養部の物凄く広い研究室でお会いした。その後、池田先生には『ドイツ・ナチズム文学集成』を企画して頂くことになるのだが、それとは別に、池田門下の若くて優秀な研究者の博士論文を手直しして柏書房から出版することになった。『ナチス・ドイツの有機農業——「自然との共生」が生んだ「民族の絶滅」』がそれで、著者は藤原辰史氏、私より一回り若く、今は京大人文研に所属する碩学の処女作である。

これが縁で、叢書バルマコンの三冊目として、藤原氏の著作『農の原理の史的研究——「農学栄えて農業亡ぶ」再考』の編集が進行中である。刊行は、おそらくこの冊子が出て間もなくの、二〇二一年一月を予定している。「農本主義」という用語を作った農学者横井時敬よこい ときたけを主軸にして、農学そのものを根本的に問い直すもので、叢書にふさわしい「薬と毒」を多分に含んだ著作である。

◆

現時点ですでに企画が通っている、四冊目以降のラインナップは次の通り(書名は仮題)。まず、四冊目に出したいのが、柴田陽一著『日本地政学史』。その次に、佐藤彰宣著『趣味としての〈戦争〉』、松尾理也^{みちや}著『大阪時事新報の研究』あたりか。ほかに、川口茂雄著『アニメ・エクスベリエンス』、長崎励朗著『ポピュラー音楽の知識社会学』といった書き下ろしも控えている。松尾氏が私と同年齢で、あとは皆、私よりもずっと若い。

今後、どこまで叢書の刊行を続けられるかは全然分からないが、目標だけははっきりしている。パルマケイア叢書の二十三冊を私が還暦を迎える二〇二五年七月までに超えることだ。それまでに、比較的硬派な人文書の出版はますます困難になっているだろうが、パルマケイア叢書の時と同様、ほかの若い編集者の斬新で面白そうな企画も織り交ぜながら、なんとか平均売上の及第点を維持しつつ、刊行を継続したいと思っている。もちろんそれには、書店員はじめ印刷・製本会社の方の協力や、校正者などの社外スタッフとの協働が不可欠なのは言うま

でもない。

◆

編集の仕事に疲れたり嫌気がさしたりした時、いつも読み返す文章に、安原顯の「『編集者』とは何か」(『決定版「編集者」の仕事』所収、その第二章)がある。安原の毒舌を目にするたびに、周りから理解されないことを気に病む必要はないと安心すると同時に、周りに理解されるようにもう少し頑張ってみようかとも思えるのだ。

つまり、疑似パルマコン的な物言いに元気づけられているわけだが、果たしてそうしてなされた仕事が生世の中に益しているのか、いまだにさっぱり分からない。

昔も今も、結局仕事を価値づけるのは現在よりも未来であり、自分よりも他者、すなわち読者であるということなのだろう。

人文会会員名簿

〒113-0033 文京区本郷2-20-7 みすず書房内

2020年12月現在

社 名	担当者	〒	住 所	電 話	FAX
大 月 書 店	佐藤 信治	113-0033	文京区本郷2-27-16 2F	3813-4651	3813-4656
御 茶 の 水 書 房	平石 修	113-0033	文京区本郷5-30-20	5684-0751	5684-0753
紀 伊 國 屋 書 店	段塚 省吾	153-8504	目黒区下目黒3-7-10	6910-0519	6420-1354
慶應義塾大学出版会	乙子 智	108-0073	港区三田2-17-31	3451-6926	3451-3124
勁 草 書 房	西野 浩文	112-0005	文京区水道2-1-1	3814-6861	3814-6854
春 秋 社	吉岡 聡	101-0021	千代田区外神田2-18-6	3255-9611	3253-1384
晶 文 社	片桐 幹夫	101-0051	千代田区神田神保町1-11	3518-4940	3518-4944
誠 信 書 房	郡司 恵太	112-0012	文京区大塚3-20-6	3946-5666	3945-8880
青 土 社	森 卓巳	101-0064	千代田区神田猿楽町2-1-1 浅田ビル1F	3294-7829	3294-8035
創 元 社	水口 大介	101-0051	千代田区神田神保町1-2 田辺ビル	6811-0662	3219-7800
筑 摩 書 房	廣井 一茂	111-8755	台東区蔵前2-5-3	5687-2680	5687-2685
東京大学出版会	澤畑 壘	153-0041	目黒区駒場4-5-29	6407-1069	6407-1991
日本評論社(休会中)		170-8474	豊島区南大塚3-12-4	3987-8621	3987-8590
白 水 社	岩野 忠昭	101-0052	千代田区神田小川町3-24	3291-7811	3291-8448
平 凡 社	登尾 純一	101-0051	千代田区神田神保町3-29	3230-6572	3230-6587
法政大学出版局	三木 拓	102-0073	千代田区九段北3-2-3 法政大学九段校舎1F	5214-5540	5214-5542
み す ず 書 房	田崎 洋幸	113-0033	文京区本郷2-20-7	3814-0131	3818-6435
ミネルヴァ書房	本橋 弘行	101-0062	千代田区神田駿河台3-6-1 菱和ビルディング2F	3525-8460	3525-8461
吉 川 弘 文 館	片山 伸治	113-0033	文京区本郷7-2-8	3813-9151	3812-3544

代表幹事 田崎洋幸

会計幹事 平石 修

書記幹事 片桐幹夫

《◎委員長(幹事) ○副委員長》

販売・企画委員会 ◎水口大介 ○森 卓巳・佐藤信治・段塚省吾・郡司恵太・登尾純一

調査・研修委員会 ◎片山伸治 ○西野浩文・廣井一茂・澤畑 壘

広報委員会 ◎岩野忠昭 ○乙子 智・吉岡 聡・三木 拓・本橋弘行

人文会ホームページ <http://www.jinbunkai.com/>

(各種情報／各社へのリンクはこちらからどうぞ)

好評7刷

記憶する体

伊藤亜紗

◇第42回サントリー学芸賞受賞!!

経験と記憶は私たちの体は何をもたらしのか。視覚障害、吃音、幻肢痛などをもつ人の11のエピソードを手がかりに体に戻る重層的な時間と知恵について思索するユニークな身体論。

本体1800円

春秋社

東京都千代田区外神田2-18-6 (税別)
☎ 03-3255-9611 FAX 03-3253-1384

〇web春秋はるとあき 人気連載更新中!
<https://haruaki.shunjusha.co.jp/> ⇒

思考力改善ドリル

批判的思考から科学的思考へ

植原 亮

クイズ感覚で問題を解いてクリティカル・シンキングの力を養い、科学リテラシーがぐんぐん身につく!

現代認識論入門

ゲテイヤ問題から徳認識論まで

上枝美典

論争の発端となった問題の解説から最新の動向まで、ゲテイヤミツクな展開を一望のもとに描く待望の入門書。

マイケル・トマセロ／中尾 央 (訳)

比較心理学の成果と哲学の議論を融合し、ヒトの道徳性はどうのように進化したかを体系的に論じる。

本体2000円＋税

本体2600円＋税

本体2600円＋税

い い ぞう

勁草書房 TEL 03-3814-6861
FAX 03-3814-6854

〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1
<http://www.keisoshobo.co.jp>

目録のご案内

人文図書3分野の基本図書および最新刊を網羅した年度版の図書目録です。

● 人文図書目録刊行会発行 A5判・平均200頁 頒価本体(各)286円

◆ 哲学・思想図書総目録
2020-2021年版
約1700点(114社)収載
特別寄稿:野矢茂樹『シンボル化された世界、そしてシンボル化されきらぬ世界』
〔掲載分野〕哲学・思想一般／倫理学・人生論／美学／日本の哲学・思想／アジアの哲学・思想／中近東・中南米・アフリカの哲学・思想／西洋哲学・思想／現代哲学・思想／宗教一般／宗教学／その他の宗教／哲学・思想関連雑誌
ISBN978-4-915268-46-5

◆ 心理図書総目録
2020-2021年版
約2400点(93社)収載
〔掲載分野〕心理総論／基礎心理／発達心理／教育心理／臨床心理／精神分析／精神医学／社会心理／その他の心理／心理関連雑誌
ISBN978-4-915268-47-2

◆ 社会図書総目録
2020-2021年版
約2200点(120社)収載
〔掲載分野〕社会一般／社会学理論／家族社会／地域社会／産業労働／福祉・教育／社会心理・マスコミ／社会問題／文化文明論／文化人類学／民俗学／神話・民話／社会関連雑誌
ISBN978-4-915268-48-9

● 人文会
〒113-0033
東京都文京区本郷2-20-7 (みすず書房内)

● 人文図書目録刊行会
〒162-8710
東京都新宿区東五軒町6-24(トーハンビル内)

見えない スポーツ 図鑑

伊藤亜紗
渡邊淳司
林阿希子

抱腹絶倒&試行錯誤の
「本邦初」研究ドキュメンタリー

「100円ショップ」があれば競技の楽しさを誰でも体験できる!? 障害者の方々にスポーツの臨場感をどう伝えるか、から始まった研究会は思わぬ方向に転じ、「人力VR」開発に挑むことに…。 本体価格 2000 円 + 税

晶文社 〒101-0051 千代田区神田神保町 1-11
Tel.03-3518-4940 Fax.03-3518-4944

アメリカ保守主義の思想史

井上弘貴

戦後アメリカの保守主義は、アメリカ社会の改革をめざす思想だった。「トランプ以前」の知られざる戦後アメリカ史を描く。 2400 円

ドナウ川の類人猿

マレーン・バーメ他

二〇〇万年前の化石が語る人類の起源
現代の類人猿の初期の祖先の化石がヨーロッパで発見された。アフリカ単一起源説の矛盾を指摘した、新しい人類の歴史。 2200 円

羊の人類史

サリー・クルサード

羊は人類の生活や文化を根本から変えてきた。羊と人びとが織りなす一万年以上にわたる壮大な歴史タベストーリー。 2400 円

青土社 東京神田神保町 ☎03-3294-7829
http://www.seidoshasha.co.jp/ (価格税抜)

創元社

叢書 パルマコン

ナチ・オカルト研究の名著、ついに増補再刊
増補 聖別された肉体
——オカルト人種論とナチズム

◆A5判・並製・384頁・本体3800 円
横山茂雄(著)

ファシストの公共性を体現した名著を完訳

大衆の強奪

——全体主義政治宣伝の心理学

セルゲイ・チャコティン(著) 佐藤卓己(訳)
◆A5判・並製・312頁・本体3500 円

大阪市中央区淡路町4-3-6 <税別>
TEL06-6231-9010 Fax06-6233-3111
千代田区神田神保町1-2 TEL03-6811-0662

記憶の心理学

基礎と応用

ガブリエル・A・ラドヴァンスキー 著
川崎 恵里子 監訳 基礎研究と理論から、日常生活での応用的側面まで記憶研究の基本トピックを幅広くカバー。この一冊で医学、法学、教育学等関連分野でも活用できる。9000 円

精神医学の近現代史

歴史の潮流を読み解く

小俣 和一郎 著 戦争、安楽死、反精神医学、優生思想等、精神医学が長きに渡り関わってきたにも関わらず、真正面から語られなかったテーマに切り込んだ話題の書。2400 円

遠隔支援スキルガイド

どこへでもつながる援助

前田正治・桃井真帆・竹林由武 編著 電話やインターネットを用いた遠隔心理支援のガイドライン、各種実践方法を示した入門書。2000 円

誠信書房 Tel 03-3946-5666
SEISHIN SHOBO 東京都文京区大塚 3-20-6 (税抜)

新刊

冷たい戦争 から 熱い平和へ

ブーチンとオバマ、トランプの米露外交

◆上◆

マイケル・マクフォール 松島芳彦 訳

オバマ政権で米露関係の「リセット」を立案、駐露米大使として「露の民主化と西側への統合」を推進した学者が明かす、緊迫の外交とは？

●各本体 3600 円 + 税

白水社 東京都千代田区神田小川町 3-24
tel.03-3291-7811 / fax.03-3291-8448

筑摩書房創業80周年記念出版 完全日本語オリジナル

エマニエル・トッドの思考地図

エマニエル・トッド 大野舞 訳

混沌の時代を見通す真の思考とはいかなるものか。数々の予測的中させてきた世界的知性が、その極意を初めて語り明かす。

筑摩選書創刊10周年 たちまち重版！

の生生まれてこないほうが良かったのか？——生命の哲学へ！ 森岡正博

古今東西の文学・哲学を往還し、長い歴史を持つ「誕生否定」の思想を検証。反出生主義の全体像を示し、その超克を図った本邦初の書！

定価(本体1800円+税) 定価(本体1500円+税)

おかげさまで80周年 **筑摩書房**
営業部 ☎03-5687-2680
<http://www.chikumashobo.co.jp/>

白川静最後の著作、全編書き下ろし

漢字の体系

白川 静

刊行記念特別定価…
本体八〇〇〇円 + 税
(二〇二二年三月三十一日まで)

通常定価…本体八八〇〇円 + 税 ●四六判 / 一二八頁

これまでの漢和辞典とはまったく違う、漢字の繋がりが見える新しい字書。約二五〇〇字を「天象・氏族・祭祀」等のテーマ、「安才・多等の形態」素別に分類し解説。

平凡社 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 3-29
tel 03-3230-6573 fax 03-3230-6587
<https://www.heibonsha.co.jp>

「英語は聞きとりになるとさっぱり…」
——そんな方へおススメ！

理想のリスニング

「人間のモヤモヤ」を聞きとる英語の世界

阿部公彦

英語の運動感覚を身につけ、語学の必須要素を鍛錬する。日本語話者のための英語習得法。

2300円 + 税

東京大学出版会
〒153-0041 東京都目黒区駒場 4-5-29
TEL 03-6407-1069 FAX 03-6407-1991
<http://www.utp.or.jp/>

法政大学出版局

http://www.h-up.com/

アーレント読本

日本アーレント研究会 編
政治的自由や公共性が危機に瀕する現在、
アーレントの思考から何を学ぶべきか。
主要テーマを掘り下げた決定版の入門書、
著作解題付。 3200円

《叢書・ユニベルシタス 1121》

普遍的価値を 求める

中国現代思想
の新潮流

許紀霖 著／中島隆博、王前 監訳
及川淳子、徐行、藤井嘉章 訳

「共に享受する普遍性」としての「新天下主義」とともに、価値相対主義でなく、
真に多様性・多元性を尊重するための思考
を提示する。 3800円

〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-3
☎ 03 (5214) 5540 / 表示価格は税別です

塩谷京子 著

探究の過程における
すぐ実践
できる

情報活用スキル55

●単元シートを活用した授業づくり 新学習指導
要領で求められている情報スキルを組み入れた授
業展開をわかりやすく提案。学習過程の工夫・改
善に役立つ書。
* 210頁 本体 2400円

すぐ実践できる 情報スキル50

塩谷京子 編著 ●学校図書館を活用して育む基礎力
小・中学校を見通した各教科等に埋め込まれてい
る情報スキルを提案。
* 212頁 本体 2200円

ミネルヴァ書房

京都市山科区日ノ岡堤谷町1
TEL 075-581-0296 * 価格税別

歴史文化ライブラリー

難民たちの日中戦争

戦火に奪わ
れた日常

芳井研一 著 かえりみられなかった人々。新資料を駆
使し、従来の「日中戦争史」に一石を投じる。 1800円

昭和陸軍と政治

「統帥権」という
ジレンマ

高杉洋平 著 横暴で非理性的な軍部？ 制度や規範意
識の中で揺れ動く昭和陸軍の苦悩に迫る。 1800円

戦後文学のみた へ高度成長

伊藤正直 著 伊藤整・庄野潤三・石川達三らの作品を経
済の観点から読み解き、高度成長に迫る。 1700円



吉川弘文館

東京都文京区本郷 7-2
☎ 03-3813-9151 税別

患者の話は医師にどう聞こえるのか

オフリー 著 なぜ病いを語つてすれがうのか。医師と患者の
コミュニケーションを徹底分析する。 原井・勝田 訳 3300円

史上最大の革命

1918年11月、
ヴァイマル民主政の幕開け

ゲルヴァルト 著 それは失敗した民主主義だったのか。ヴァイ
マル期の実像を活写する。 大久保・小原・紀・前川 訳 800円

感情史の始まり

ブランバー 著 感情史とは。感情を主題に人文社会科学と生命
科学を架橋する歴史学の斬新な成果。 森田直子 監訳 3800円

懐古する想像力

イングランドの批評と歴史

コリーニ エリオットからウィリアムズまで、同時代を彩る
歴史認識をもたらした文芸批評の展開。 近藤康裕 訳 5800円

みすず書房 (税別)

東京都本郷2-20-7 www.mszz.co.jp

2020年12月25日発行 年3回発行 第136号

発行所 人文会

〒113-0033 東京都文京区本郷2-20-7 みすず書房内

編集協力 アジュール・プロダクション

印刷 中央精版印刷株式会社

〈非売品〉